

# 日常と記憶のあいだ

Site 宮城県石巻市船越



Analysis 1 過去の津波被害

過去の記録を調べると船越地区は30~40年周期で津波の被害を受けている。過去にも何度か、今回のようにまち全体が壊滅的な状態になったこともある。



Analysis 2 被害を知らない世代

津波による被害は毎度大きい。海辺の家は倒壊し、過去に高台に移ったこともあった。しかし、漁業への利便性から倉庫に寝泊まりする漁師が現れ、やがてそれが発展していき住居を海沿いに戻すというのが過去に繰り返されていた。このような行為は津波を経験していない世代に見られる。

Analysis 3 土着性の強さ

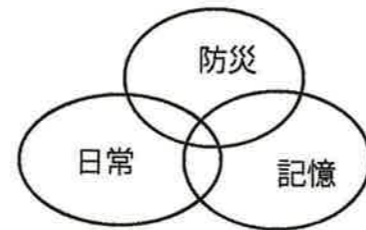
今回の津波でまちは壊滅状態となった。しかし現在、船越の人々は仮設住宅のある隣町から毎日船越に通い、復興活動に励んでいる。彼らのブログには「津波は憎い。でも船越が好きだ。これからも海の恩恵を受けながら船越で暮らしたい」と書かれている。住民らがこの土地にとっても愛着を持っていることがわかる。

Concept

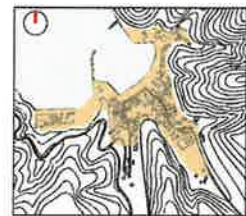
防災、日常生活、津波の記憶を次の世代に伝えることそれぞれのバランスを考える。

津波の心配のない高台に住居を移し、まちの公共施設は平野部に計画する。

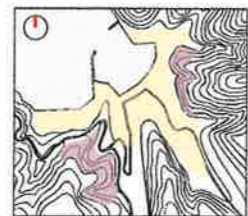
海と豊かな関係を築いてきた人々のための新しいまちの形。



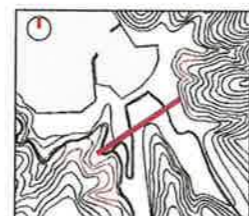
Diagram



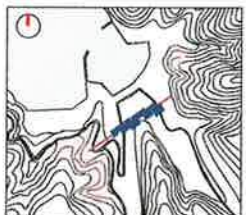
① 今回の津波で被害を受けた範囲



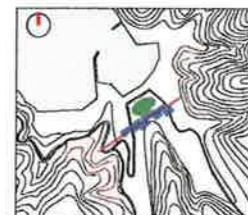
② 津波で被害を受けなかった高台に住居区を設定する



③ 住居区どうしをつなぐ直線の歩道をつくる



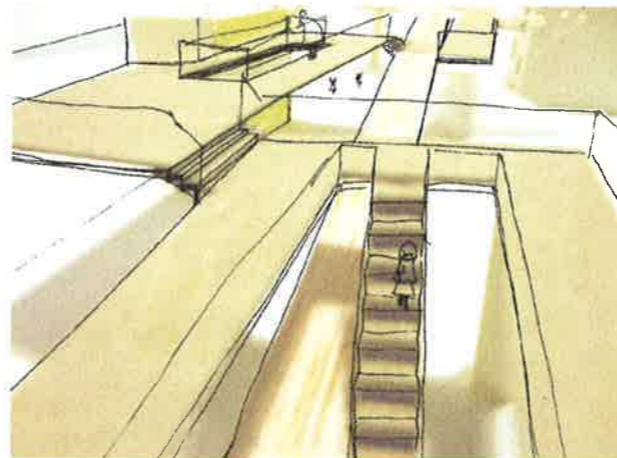
④ その直線に絡みつくようにデッキを設置する



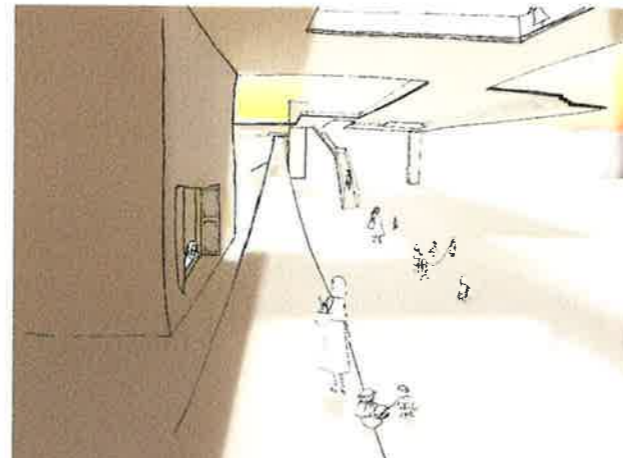
⑤ 海側に開いた平地は芝生の広場とする



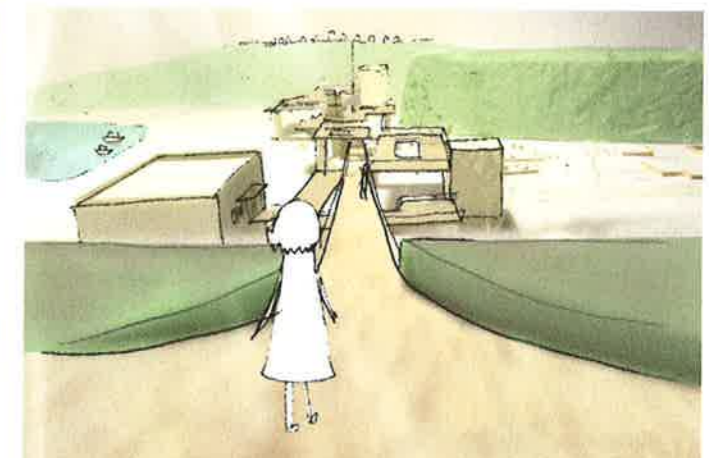
⑥ 山側には津波で流された住宅の基礎部分を残した庭とする



避難路とデッキが立体交差する



高台への最短非避難路が続く



住宅地から平野部へ続く歩道

